

絵本を媒体とした子育て支援に関する一考察

小笠原文

A Study of Picture Book Mediated Childcare Support

Fumi OGASAWARA

In this article, the writer proposes to look at children and the places they encounter picture books in a diversified fashion. Specifically, the writer develops the viewpoints put forward in 'Children and Their Encounters with Picture Books' and 'Picture Books as a Childcare Support Tool', with regards to picture book mediated childcare support. On that basis, it is a study of 'Children and Their Encounters with Picture Books' that draws on 'The Power of Raising Children That Picture Books Have'. In the end, the writer considers that children's 'experiences' are their encounters with picture books, paying particular attention to the essential condition of 'aesthetic experience' that contributes to children's development. The writer concludes that the vital role of childcare initiatives is to provide an environment in which children 'realize' the aesthetic, day in day out, where formerly, the accumulation of children's aesthetic experience points was entrusted to the family.

キーワード：絵本 Picture Book、子育て支援 Childcare Support

1. はじめに

子どもが育つ「好ましい環境」の一つとして「絵本のある環境」が挙げられるであろう。比較的容易に整えることのできる環境であることに加え、近年では、絵本が「母子関係の基本的な良い土台作りに貢献していることが示唆されている。」(岩崎 2013)、「本や新聞を読むことに関する働きかけは、子どもの学力と非常に強い関係が見られる。」(浜野 2014) などとする多くの研究・調査が数値で裏付けられて発表され、子育ての成功法を絵本に求める傾向は強い。低迷していると言われる出版業界でも「絵本・児童書」は唯一、その発行部数を伸ばしているジャンルであり、年間に約3000点もの新刊が発行されていることから、

その需要の多さが伺える。

また、子どもの読書活動について、国を挙げて支援する「子ども読書年」(2000年)や民間団体の行う子どもの読書活動などを助成する「子どもゆめ基金」(2001年)、さらには「子どもの読書活動の推進に関する法案」(2001年)の施行などを経て、かつては家庭や幼稚園・保育園などの教育・保育施設が中心であった子どもと絵本の出会いの場が拡大しているといえる。

本稿は、多様化する子どもと絵本の出会いの場について、主に子育て支援という視点から検証をする。その上で、「絵本が持つ、子どもを育てる力」を引き出す「子どもと絵本の出会い」について考察を行うものである。

2. 図書館と美術館—絵本と出会う場所—

2-1. 美術作品としての絵本原画展示を主軸とする美術館

絵本は言語表現と造形表現（主には絵画・デザイン表現）がお互いを充足し合いながらある世界観を演出するものである。本という形態を持ち、出版物としての流通手段を持つ性質上、子どもが家庭や教育・保育施設以外で、絵本と出合える場所は本屋と図書館であろう。さらに、芸術的要素を持ち合わせる絵本は美術館にも居場所を持っている。国立国会図書館支部国際子ども図書館の報告では、国内の絵本館・児童作家記念館は2016年の調査によれば79館にもものぼる。

しかし、これらの絵本館・児童作家記念館は対象者が子どもであるとは限らない。小淵沢絵本美術館（山梨県北杜市）は、「富士や南アルプスを眺めながら、欧米の絵本に囲まれた“夢と憧れ”の静かなひと時を心ゆくまでお過ごしください」と絵本を大人の静かな世界と位置付けている。安曇野絵本館（長野県安曇野市）は、「絵本の絵を子供の領域から解放する場として、大人になってしまった人たちが曾て子供だったことを再認識する場として、静かで落ち着ける空間を提供したいと創られました。」と大人のための絵本を強調する。えほんミュージアム清里（山梨県北杜市）も、常設展示作品としてイギリスの絵本作家、エロール・ル・カインの作品を所有し、「国内外の絵本の原画を展示する絵本美術館」として、「魅力あふれる絵本の原画の紹介」を目的としている。こうした、美術作品としての絵本原画の展示を主軸とした美術館は「子どもが楽しむ」という機能については重点を置いていない。

2-2. 絵本の世界を追体験する美術館

それでは、来場者として子どもを意識している、もしくは子どもを主な対象者としている美術館とはどのようなものであろうか。いくつか例を挙げてみたい。いわむらかずお絵本の丘美術館（栃木県那珂川町）は、ねずみの家族の生活を描く「14匹シリーズ」などで国際的にも著名な絵本作家であるいわむらかずお氏が絵本の世界とその舞台である里山の自然が同時に楽しめる場所づくりをめざして、1998年4月に開館した美術館である。絵

本・子ども・自然をテーマに活動する栃木県在住の絵本作家のプロジェクトに地域の「子育て子育て総合支援事業」（1997年－1998年）が導入され、美術館周辺が収穫体験や自然観察などができる「えほんの丘」として整備された。ここでは、原画などを鑑賞しながら絵本の世界に思いを馳せる静的な想像活動ではなく、絵本の世界を現実世界に持ち込み追体験できるしかけをつくり、動的に体験することから想像を膨らませる活動が可能になり、多くの子どもにとって、絵本の世界へ入る難易度が低くなる。

このような、体験型・参加型のしかけを持った展示会は、想像の世界や文化・科学の世界へ子どもを誘う効果的な方法として、さまざまな美術館で開催されている。絵本に着目した大きな催しとしては、夏休みの子どものための文化事業として、毎年福岡アジア美術館で開催される「絵本ミュージアム」であろう。子どもたちが“絵本”を通じて感じることや表現することの素晴らしさを体感でき、子ども同士、親と子、そして親子と社会をつなぐ場をつくることを目的に、2007年から始まった「NTT西日本スペシャル おいでよ！絵本ミュージアム」シリーズは、2016年までに延べ40万人を超える来場者を記録している。この「絵本ミュージアムシリーズ」は、子どもにとって身近な絵本をテーマにした、新しい形の「子どものためのミュージアム」であり、その特徴として、①親子や子ども同士が、楽しく絵本や物語の世界を体感できる展示や空間、②ワークショップなどの体験型イベントの実施、③NTTグループが提供する子ども向けデジタルコンテンツの展示を一体化3点が挙げられている。つまり、本来「静的活動」であった美術館鑑賞を「動的活動」に転換した点が新しく、より多くの子どもに開かれたということであろう。

2-3. 絵本館・図書館

2-3-1. 日常的な絵本との出会い 2000年以降

一方で、こうした「体験型・参加型」の展示は、アミューズメント的な側面が強く、絵本の世界に入り込む前の段階で、子どもたちが満足してしまう場合がある。また、入館料などを見ても、全ての子どもの開かれる場、絵本に親しむ場にはなり得ていない。

子ども、あるいは子育て中の親と絵本の日常的かつ長期的な出会いを推進する開かれた場所としては、図書館が挙げられる。その中でも絵本・児童書を専門としたいくつかの専門図書館や私設図書館について例を挙げる。わが国では、国際子ども図書館が国立国会図書館の支部図書館として、「子ども読書年」の2000年に開館された。これは、1906年に帝国図書館として建てられ、1929年に増築された明治期ルネッサンス様式の建物を再生・利用したもので、国立としては初の児童書・絵本に特化した専門図書館である。蔵書数は2016年3月現在、国内図書 280,493冊、海外図書97,116冊、国内雑誌1,656タイトル、海外雑誌185タイトルと群を抜いた国内一の規模を持つ。定期的に開催されるイベントとしては、「子どものためのおはなし会」と「子どものための音楽会」の2つがある。おはなし会は30分程度で、日によって内容や構成が変わる。その内容は、おはなし(ストーリーテリング)、絵本の読み聞かせ、わらべうたや手遊びなどで、大がかりな仕掛けや斬新さはない。純粋に子どもたちがおはなしの世界を楽しむことを目的としており、そのために、18歳以上の人は参加不可で、子どものみが部屋に入るという方法を取っている。

この国際子ども図書館開館の4年後には東京都の板橋区にいたばしボローニヤ子ども絵本館が開館された。この絵本館は北イタリアのボローニヤから寄贈された世界約85カ国、2万5千冊の絵本を所蔵している海外絵本の図書館である。1981年に板橋区立美術館で開催された「ボローニヤ国際絵本原画展」を機に、板橋区とボローニヤ市の絵本を通じた交流が始まる。その交流は、1993年から開始される「ボローニヤ児童図書展」事務局から海外絵本の寄贈へと発展していく。2004年に小学校であった建物の一部を改築し、これまで寄贈された海外絵本に子どもたちが日常的に親しむことのできる施設として絵本館が開館した。

翌年の2005年に、開館した福島県いわき市の絵本美術館「まどのそのまたむこう」は、私立保育園の附属施設として建てられた小規模のものであるが、図書館と美術館双方の魅力が融合された空間として話題を集めている。安藤忠雄氏の設計によるもので、太平洋が一望出来る館内では約1,500冊の絵本を壁一面に展示し、手にとって読む

ことができる。保育園関係者以外も入館・観覧が可能であるが、園児の使用が優先され、電話番号なども公開されていない。この絵本美術館では絵本は二つの機能を持つ。一つは従来の読み聞かされるための絵本としての機能であり、もう一つは空間を構成するオブジェとしての機能であろう。インスタレーション作品のような空間の中で、子どもたちは身体的にも内面的にも「絵本の世界」を経験することができる。

2006年には石川県小松市に市営図書館の分館として「空とこども絵本館」が開館された。旧小松警察署(1932年)と旧石川商銀小松支店(1930年)という歴史的な建物を整備して、子どものための図書館を開館したという経緯は、国際子ども図書館と共通した部分がある。この絵本館では、特に0歳から5歳の就学前の乳幼児を対象とした絵本や紙芝居を蔵書とし、「0歳からの絵本との出会い」を推進している。小松市は、子育て支援の一環としてブックスタートを全国的にも早期に取り入れた自治体として知られているが、「空とこども絵本館」はその拠点となっている。

2-3-2. 2000年以前 民間事業と公共事業

このように概観すると、「子ども読書年」の2000年以降、「子どもと絵本の出会いの場」の拡充が特に公共事業として促進されていることがわかる。「本に到達する前段階」である「本の種類」として図書館の片隅に収まっていた絵本は、子どもの育ちに関わる重要かつ多様な機能を持つものとして、独立した居場所を確立しつつある。もちろん、2000年以前にも日常的かつ長期的な子どもと絵本の出会いを提供する場は存在していた。民間のものとしては、1995年に新潟県の魚沼市の豪雪地帯にオープンした「絵本の家ゆきぼうし」が挙げられる。「自然と子どもと絵本」をテーマに、絵本や童話、自然の本など約9700冊を所蔵している。無料で利用することができ、賛助会員からの会費によって運営されている。また、1981年に長崎市で児童専門書店として設立され、わが国最大の配本ネットワークを確立している童話館の存在は重要である。「絵本のある子育て」を80年代から提唱し、優れた絵本を厳選して子どもとその親に届けるという活動理念は、その後「子どもと絵本の出会いの場」が各地で拡充される際に多くの

示唆を与えた。童話館自体も1999年に「祈りの丘美術館」を開館し、絵本の絵の芸術性を強調する。童話館の創始者川端強（1999）は、「絵本の練りあげられたお話は、文学と呼ぶに値しますし、絵は、一枚の絵画として美術の高みにあります。」と述べ、世にある多くの絵本は、必ずしも鑑賞にたえるものとはいえ、お話と絵の両輪によってつくりあげられた芸術が、一部のすぐれた絵本であると明言している。

公共事業として着目したいのは、富山県射水市に1994年に開館された「射水市大島絵本館」である。1988年、開町100周年を迎えようとしていた旧・大島町では、国家政策である「ふるさと創生事業」（1988～1989）について町民の意向調査をしたところ、「絵本による文化高揚」を提案する意見が多く見られた。それらを受け、1991年の第3次大島町総合計画に絵本事業が盛り込まれ、「住みよい、明るい、豊かなまちづくり」という基本目標のもと、同年、絵本館創設事業が開始され、3年後の1994年に開館の運びとなった。その後、2005年の市町村合併に伴い、「射水市大島絵本館」となり、2011年から財団法人となっている。射水市大島絵本館は、地域活性化、まちづくりの手段として絵本に着目し、成功している先駆的な例であるが、その3年前に北海道の上川郡で「剣淵絵本の館」が開館されている。おそらくわが国で初めての「絵本による地域活性化」の成功例であろう「剣淵絵本の館」について、次章で言及していく。

名 称	所在地	開館	蔵 書
剣淵絵本の館	北海道上川郡 剣淵町	1991	3万6千冊
射水市大島絵本館	富山県射水市	1994	1万冊
絵本の家ゆきぼうし	新潟県魚沼市	1995	9千冊
祈りの丘絵本美術館	長崎県長崎市	1999	4千点1万冊
国際こども図書館	東京都	2000	37万7千
いたばしボローニャ 子ども絵本館	東京都板橋区	2004	2万5千冊
絵本美術館 まどのまたそのむこう	福島県いわき市	2005	1千5百冊
空とこども絵本館	石川県小松市	2006	1万3千冊

3. 剣淵絵本の館

3-1. 沿革

「剣淵町絵本の館」は、2016年の住民基本台帳人口が3291人の北海道上川郡剣淵町に所在する町立の絵本の専門図書館である。旭川市からおよそ45km北に位置する小さな町の図書館への来館者は、町内の住民だけではなく、北海道内、そして日本各地から訪れ、その数は年々増加の傾向にある。交通の便が良いとは言えない北海道の小さな町の町立図書館が遠方からの訪問者を集めるといふことは、着目に値する。

1988年、剣淵町では商工会青年部で「町づくり講演会」を開催し、講師の小池暢子氏に「道北の小さな農村らしさを活かした、都会ではできない文化の町としての歩み」を提案された。同年、当時福武書店児童書部の編集長であった松居友氏を招き、「すばらしい絵本の世界」をテーマに公民館講座を開催した。その中で、ヨーロッパ滞在経験を持つ松居氏は、「剣淵の田園風景は、フランス、ドイツの田園風景にどこか似ている」とした上で、「絵本の持つ自然や生命を大切にする心を持った人たちが暮らすこの町に絵本の美術館ができたらどんなにすばらしいことか」と述べた。同じ年に開催された二つの講演会の主題である「町づくり」と「絵本」が剣淵市の「絵本をテーマにしたまちづくり」というコンセプトを形成することになる。年内に商工会青年部、農業者、社会福祉施設職員、自治体職員、主婦などの有志からなる「けんぶち絵本の里を創ろう会」が設立され、町で初めての絵本原画展が開催された。

翌年の1989年8月には世界各国から絵本の原画（27カ国、作家約60名）を集め、「けんぶち国際絵本原画展」の開催に至った。これが第一回目となり、剣淵市では毎年8月に絵本原画展を企画している。また、同年には町の学校、保育所、店舗、子どもの居る家庭などに絵本を届ける「絵本巡回文庫」など、絵本を手段とした町づくりの一環として子育て支援活動を始動させている。

1990年の手づくり絵本展の開催や道内作家絵本購入を経て、1991年8月には旧役場庁舎を改装して絵本を集めた専門図書館の「絵本の館」を開館する。町全体を「絵本の里」とし、教育機関はもちろん、ホテルや道の駅も「絵本」を全面的にア

ピールする中で、「絵本の館」はその中心的な役割を果たすことになっていく。

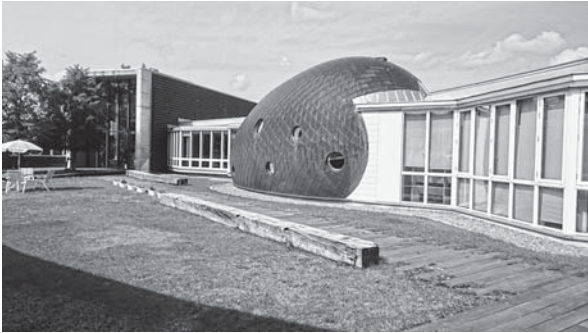


写真1：中庭を囲む環状の建物。たまご型のドームの中には、「木の砂場」があり、子どもの遊びスペースになっている。



写真2：子どもの遊びスペースの内側。「木の砂場」には10万個の木の玉が入っている。



写真3：木の玉で遊ぶ3歳児。

3-2. 空間

2004年には現在の場所に新築，移転した剣淵絵本の館は，2010年に「町づくりの拠点」となっていることが評価されて第12回公共建築優秀賞を受

賞している。建築物としては，上から見ると中庭を囲んだ楕円形で，館内をぐるりと一周できる構造になっている。入り口で靴を脱いで入館するため，家にいるような感覚でくつろげることも子育て中の保護者から支持される魅力の一つである。

「えほんのへや」には，背の低い本棚いっぱいには，さまざまな絵本が置かれている。赤ちゃん用絵本，植物，のりもの，翻訳絵本などさまざまなコーナーが設けられ，さらに「月」の絵本，「秋」の絵本などテーマごとの本棚もあり，子どもたちの注意を惹き付けている。子どもが入って遊べる，ままごと遊び家具のおうち「ごっこはうす」や「木のパズル」も設置されていて，子どもたちの自発的な遊びを促している。

リニューアル・オープンした剣淵絵本の館のトレードマークともいえるたまご型の部屋の中には，木の玉約10万個が入った「木の砂場」がある。子どもたちが，視覚，触覚，聴覚などさまざまな感覚と創造力を駆使して飽くことなく遊び込める場所となっている。



写真4：テーマごとの本棚。

3-3. けんぶち絵本の里大賞

剣淵絵本の館では，1991年の開館以来，「けんぶち絵本の里大賞」を毎年開催している。読み継がれた「名作」ではなく，新しくまだ評価も定まらない本の中から自分の好きな絵本を選ぶ「けんぶち絵本の里大賞」は，子どもと大人が共に好みの本を選ぶ中で，お互いの感性を認め合い育むことを目的としてスタートした。

前年4月1日から実施年の3月31日に出版された絵本であることが条件で，その中から応募された絵本を展示し，来館者が好きな本を選んで投票をするというものである。投票期間は毎年8月1日から9月30日までの2ヶ月間で，来館者全てに投票権がある。第25回目となった2015年度は357

作品の応募があり、9893票（来館者は1日につき1回の投票権があり、総投票者数は2309名）の投票があった。その結果、大賞には、『もったないばあさんのてんごくとしごくのはなし』（作・絵 真珠まりこ／講談社）が、びばからす賞には『へいわってすてきだね』（詩・安里有生、画・長谷川義史／ブロンズ新社）『トラネコとクロネコ』（作・絵 宮西達也／鈴木出版）『しんでくれた』（詩・谷川俊太郎、絵・塚本やすし／佼成出版社）の3点が、あるばか賞には『ふしぎなにじ』（わたなべちなつ さく／福音館書店）が、それぞれ選ばれた。

「けんぶち絵本の里大賞」の他に、毎年2月中旬から3月下旬の「けんぶち絵本まつり」など、全国的に注目される企画も開催される一方で、町づくりに根ざした活動も充実している。第一、第二土曜日の「おはなしタイム」や第三、第四土曜日の「土曜アート教室」は無料で開講されている。2003年に始まった乳幼児絵本体験事業では、ブックスタート活動を行っている。また、2005年からは子どもの居場所づくり事業がスタートし、毎週火曜日には「わくわく放課後タイム」として児童たちを対象におはなし会や工作教室などを行っている。



写真5：2016年「けんぶち絵本の里大賞」の投票会場。350冊の新刊絵本が展示され、自由に読むことができる。

4. 子育て支援 沿革と現状

わが国における子ども子育て支援政策は戦後、戦災孤児や生活困窮者の子どもを救済する児童救済、児童保護に始まった。1947年には、児童全般の福祉を増進する児童福祉法が制定され、全ての子どもの福祉向上と健全育成が目指された。その後、子育て政策は、急激な高度経済成長を遂げ、

激変する社会の中で、深刻化する子どもに関する諸問題への対応へと変化し、対象者も子どもから家庭、あるいは親へと移行することになる。さらに、1990年の「1.57ショック」を受け、子育て支援の目的は少子化への対策が主軸となる。これについては、「政策の目的も考え方においても一貫性に欠けた」（村上 2011）「主な政策とその対象も子どもから、母親へ移り、さらに仕事と育児の両立支援における女性労働者を対象とするなど、誰に、何をすればいいのかまとまらず混乱があったように思われる」（同上）という否定的な意見も多く見られる。

倉石（2001）は、現在に至る地域子育て支援事業の全国レベルでの実質的な開始について、1994年のエンゼルプラン策定以降あるいは策定前後とし、それは、「少子社会への対応としての社会的子育て支援の推進」という形で進められているとする。1991年に開館した「剣淵絵本の館」や1994年に開館した「射水市大島絵本館」は、この社会的子育て支援という文脈の中で誕生したものであったと考えることができる。つまり、主には、家庭や幼稚園・保育園などの教育・保育施設の子育てのツールであった絵本が、社会的な子育て支援のツールとして期待され、その居場所を拡大していったのはこの時期であった。さらに、時を同じくして、子育て支援と絵本を組み合わせる活動がイギリスで始まったことも、その後のわが国の社会的子育て支援の中での絵本の位置を有利なものにしている。

5. 子育て支援と絵本

絵本を用いた子育て支援の代表的なものとして、ブックスタート事業が挙げられる。ブックスタートとは、1992年にイギリスのバーミンガム市で始まった活動である。地域で生まれた子どもに対して、言葉や文字に出会う機会を平等に提供することを目指して始まったもので、背景にはバーミンガム市の移民の多さに起因する識字率の低下や離婚率の上昇に伴う子育てが困難な親の増加などの社会問題があった。日本では2000年の「子ども読書年」に開催された読書年推進会議の中でイギリスでの取り組みが紹介され、同年11月東京都杉並区での約200家庭を対象とした試験的な実施

の後、翌2001年12市町村で本格的に活動を開始した。その数は次第に増加し、2016年現在では全国979市区町村がブックスタート事業を展開している。日本の場合、イギリスとは異なり識字率向上という意図はなく、第一の目的として「親子のふれあい」を掲げている。具体的には、自治体が行う0歳児検診などの機会に、「絵本」を手渡すだけではなく、「赤ちゃん絵本を楽しむ時間」を体験する活動を行っている。手渡されるブックスタート・パックには、絵本のほかに、各自治体で作成した推薦絵本リストや子育てに関する資料が入っている。その場でスタッフと親子と一緒に絵本を楽しみ、「親が子どもに絵本を読むのではなく、親子で絵本をシェアする」ブックスタートの目的を伝えている。前出の小松市「空と子ども絵本館」はブックスタートについて、「抱っここのあたたかさのなかで、赤ちゃんに語りかけることにより、ことばと心を通い合わせる。そんなかけがえのないひとときを『絵本』を介して持つことを提案するもの」と説明している。「剣淵絵本の館」では「赤ちゃんと保護者が、『絵本』を介してゆっくりと心触れ合うひと時のきっかけをつくり、一人ひとりの赤ちゃんに、絵本を開く楽しい体験をしてもらう活動で、家庭と住民活動団体、行政との連携の中で進める。」としている。

6. まとめにかえて—美的経験としての絵本—

本稿では、絵本を媒体とした子育て支援について、「子どもと絵本の出会い」という観点と、「子育て支援のツールとしての絵本」という観点からその展開を明らかにしてきた。1994年のエンゼルプラン策定前後に「少子社会への対応としての社会的子育て支援の推進」という形で進められた子育て支援政策は、「絵本が持つ、子どもを育てる力」に着目をする。それは、2000年の「子ども読書年」以降、「子どもと絵本の出会いの場」の拡充が特に公共事業として促進されることから、絵本に対する期待が伺える。

それでは、どのような「子どもと絵本の出会い」が「絵本が持つ、子どもを育てる力」を引き出すことができるのであろうか。

絵本が子どもの発達に寄与することは既に多くの研究者が指摘しているが、論者は絵本と子ども

の出会いが子どもにとって「経験」であること、特に「美的経験」であることが子どもの発達に寄与するためには不可欠の条件であると考える。

美的経験とはなにか。J. デューイによれば、美的経験は知性的であると同時に情緒的な経験であり、この漠然さが根源にあり、基盤になるものである。つまり、「日常的ではあるが美的次元に至るに十分な、たとえば暖炉の中で薪をいつまでもかき回すことにとらわれている行動のような、本物にして《充実した》いくつかの経験を想起して、喜びと認識のこの漠然さが美的経験者の証だとする」と述べている。デューイは「暖炉の中で薪をいつまでもかき回すことにとらわれている行動」という例を出しているが、色とりどりの表紙に見入って、その中から真剣に、慎重に絵本を選ぼうとする幼児は美的経験者ではないだろうか。何百冊もの美しい絵本に囲まれた空間で、小さな椅子に腰掛け、ページを一枚一枚めくりながら絵本の世界を静かに訪問する幼児は美的経験をしているのではないだろうか。



写真6：剣淵絵本の館「えほんのへや」。選んだ本を読める空間があちこちに設けられている。

J-M. シェフェールが、デューイの言説から引き出した以下の叙述も絵本の世界に遊ぶ子どもを想起させるには十分であろう。「美的行動に包まれた認識活動は、情緒的に満たされているということ、再び求められるということ、価値があり、《それが引き起こすことができる喜びでより価値を高めるとのことだ》。」

さらに、「美的経験の日常性」について、A. ケルランは以下のように述べている。「美的なるものは、ただ《ハイカルチャー》だけに属するものではなく、それどころか《日常的な》生活経験にもつきまといっているものだ。さらには成年のみな

らず幼年期にこそ重要なのだ。」と述べ、「ごく単純に《人間の精神的な横顔》特有の行動としての美的行動は幼年期と日常経験において根を張るのだ」と断定している。

美的感性とは美的なるものを感じ取り、それに感動する能力である。それは全ての子どもに備わっているものであるが、その感度には個人差があり、「磨く」ことによってその能力は育つ。美的感性が磨かれた子どもは美的感動を獲得していく。子どもにとって感動は重要な経験である。なぜなら感動は契機となり、生きる原動力となり得るからである。一般的に、感動は一過性のものであるが、美的感動は地味だが心に残り続けるという特性を持つ。また、主体の長期的な内的成長を可能にすることからも乳幼児期に美的感動を得ることは重要であると考えられる。かつては家庭に一任されていた子どもの美的経験値であるが、美的なるものに子どもたちが「気がつく」日常的環境を提供していくことは現代の子育て支援事業の重要な役割となるであろう。

引用並びに参考文献

倉石哲也 (2011) 子育て支援の理念 地域子育て事業の“これから”～転換期を迎えた子育て支援事業～. みんなでつながる子育て支援－地域における子育て支援に関する調査報告書－社会福祉法人日本保育協会, 3-16

村上千幸 (2011) 子育て支援の現状と方向性. みんなでつながる子育て支援－地域における子育て支援に関する調査報告書－社会福祉法人日本保育協会, 17-27

国立国会図書館 国際子ども図書館HP <http://www.kodomo.go.jp/index.html>

浜野隆 (2014) 家庭環境と子どもの学力－家庭の

教育投資・保護者の意識等と子どもの学力－. 平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究, 国立大学法人 お茶の水女子大学, 21-26

岩崎衣里子 (2013) 絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの語いの発達に及ぼす影響～子どもの社会情動的発達との関連から. 白百合女子大学大学院博士後期課程学位論文

横山真貴子, 上野由利子, 木村公美, 原田真智子 (2007) 4歳児の家庭における絵本体験の特徴－幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析－. 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 49-57

川端強 (1999) 絵本の森の魔法の果実. 童話館出版

森俊之, 谷出千代子, 乙部貴幸, 竹内恵子, 高谷理恵子, 中井昭夫 (2011) ブックスタート経験の有無が子どもの生活習慣や読書環境に及ぼす影響. 仁愛大学研究紀要人間学部編 (10)

小笠原文 (2015) 乳幼児の美的経験－「芸術の教育的根源について」からの考察－. 広島文化学園大学 子ども・子育て支援研究センター年報 (4・5) 21-26

Kerlan, Alain. 小笠原文 (2015) 芸術の教育的根源について. 広島文化学園大学学芸学部 子ども学論集 (2) 69-83

Schaeffer, J-M. (2000) *Adieu à l'esthétique*. Paris, Presses universitaires de France. 15

Kerlan, Alain. (2013) *A la source éducative de l'art*. Staps. 2013/4 n° 102. 21

Dewey, John. (1934) *Art as Experience*. Minton, Balch & Company, New York 栗田修 (2010) 経験としての芸術. 1-2